

---

# たで喰うムシもすきすき

ジハイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

たで喰うムシもすきすき

### 【ZPDF】

Z9892V

### 【作者名】

ジハイ

### 【あらすじ】

マニー・アン侯爵家次女 アリシア・カルタヘナ・マニー・アン、側室候補として、第三王子殿下の学友となりました、つこせつき。

眼福、眼福。

あ、よだれが・・・。

え、ちょ、その凶器は、何に使つおつもりですか？

田指せ、ハグロメ！

つらぬけ、王道（作者の田口満足的な）！

あからいめずこ、かきあげろ（作者がヘタレですみません）！

1 プロローグ

おお～～～！！

来了～～～～！！

内心で激しく喜びの雄たけびを上げて居る私を余所に、正式な手順  
が踏まれ、納まるべき所へと納まっていく。

マニアン侯爵家次女 アリシア・カルタヘナ・マニアン、側室候補として、殿下の学友となりました、ついさっき。

本当、至福の時間だつたわ。

いや、殿下との初顔合わせ的な、ね。

もう、生殿下ですわよ、生殿下！

いやあん、どうもこやうへ、せんと。

おおつと危ない。

## 2 生は最高！

「殿下、『機嫌麗しゆう。アリシア・カルタヘナ・マニアント申します。以後よしなに。』」

節目がちこ、楚々として。

でも、だめ、やっぱりどうしてもチラチラと目が行ってしまう…。  
て、あ、めちゃくちゃ嫌そうな目で視線逸らされた…。  
え、視線に気付かれやつたとか！？  
どうしましょう…。

「余は疲れた。もう下がつてよい。」

き、気付かれていませんわよね？

どうにか表面上は取り繕つてその場を辞した。

あてがわれた部屋で、少しだけ氣をゆるめた。

ああ、心の内から言葉遣いに気をつけないといけないかしら？

でも、はあ、もづ、眼福よ、眼福。

何、あの麗しさ、おかわいらしさ！

思い出すだけで、もう食が進みそ、まつ、コホン、いやだわあ、私  
つたら。

柔らかそうな艶やかな黒髪、まるで天使のよつと美しさお顔にはト  
パーズのような褐色の目、すべすべのお肌。

同じ年の16歳だといふのに、私の肩より少し高いだけの身長に華  
奢なお体。

そう、殿下は10歳のお姿のまま、成長が止まっている。

何を隠そ、わが国の主とも言つべき第三王子殿下は、呪いつた。

そして、幸運にも、私は美少年愛好家！

全くもって、ツイテる、じゃなかつたですわ、ツイテいますわ！  
ちょっと待つて、美少年をはべらして、あ～んなことや～お～んな  
こととかしてないですか～。

いえ、ねえ、適齢期なのに、こんな趣味（性癖ではない！）なのを  
憂いた両親＆姉弟たちの苦肉の策が今回の側室計画だったわけ、で  
すの・・・。

でも、変態じやな、くてよー！

私は、ほんと、眼福を得られるだけで幸せなんです、もの！  
えと、まあ、ねえ、妄想が暴走することもたまにはあるけれど、私  
の頭の中を知られなければ、誰にも迷惑をかけないわけだしねえ。  
それに、第三王子殿下には、確実にお世継ぎが求められているわけ  
でもな、ありませんし。

側室になれたら、あんな眼福を毎日得られるという幸福な日々を送  
れるだらけけれど、そこまでの野心なんかありませんしねえ。

### 3 状況説明？ いえいえ、自己紹介的な何かですよ。

あてがわれた部屋で、少しだけ気をゆるめた。

ああ、心の内から言葉遣いに気をつけないといけないかしら？  
うん、無理。

でも、はあ、もひ、眼福よ、眼福。

何、あの麗しい、おかわいらしさー。

思い出すだけで、もう食が進みそ、まつ、コホン、いやだわあ、私  
つたら。

柔らかそうでいて、艶やかな黒髪、まるで天使のような美しいお顔  
にはトパーズのような褐色の目、すべすべのお肌。

同じ年の16歳だとこうのに、私の肩より少し高いだけの身長に華  
奢なお体。

そう、殿下は10歳のお姿のまま、成長が止まっている。

何を隠そ、わが国の宝とも言つべき第三王子殿下は、呪いつき。

そして、幸運にも、私は美少年愛好家！

全くもつて、ツイてるわ！

ちょっと待つて、美少年をはべらして、あ～んなことや～お～んな  
こととかしてないから、ひかないで！

早い話が、適齢期なのに、こんな趣味（性癖ではない！）が、重要  
！）なのを憂いた両親＆姉弟たちの苦肉の策が今回の側室計画だつ  
たわけで・・・。

ほんと、眼福を得られるだけで幸せ～！

えと、まあ、ねえ、妄想が暴走することもたまにはあるけど、私の頭の中を知られなければ、誰にも迷惑をかけないわけだしねえ。それに、第三王子の殿下には、確実にお世継ぎが求められているわけでもないし、っていうか、無理だし。

側室になれたら、あんな眼福を毎日得られるという幸福な日々を送れるだろうけれど、そこまでの野心なんかないわあ。絶対、お父様が心労で倒れるわ、うん。

「アリシア様、ちょっと聞いてらっしゃいますか！」

「え？ 何かしら？」

「まあ、また、妄想してやがりましたわね、お嬢様……。」

「ええっと、エリーさん、淑女がそのような言葉を発しては

「人の苦労も知らないで、全く何をお考えになつてらっしゃるんだかーそりゃあ、言葉も悪くなつてしまふともー」

「うつ。」「めんなさい。」

「まあ、良いですわ。それよりも講義では節度を持つて行動なさつて下さいねー。」

「え、ええーわかつて、いえ、無論そのつもりですわ。」

「でないと、旦那様へ報告をさせていただきますからね、い・ろ・い・

「ひいい～～～。そ、そりやあ、色々無茶頬んじやつたりしてるのは申し訳ないけど、そんなに怒らなくつたって。」

恐すぎですよ、Hリーさん。

私と似たような容姿してたって、あなたの方が目鼻立ちの整つた美人さんなんですから、断然恐いんですよ！

「はあ、もう少し」自覚いただければ、私の心労も減るのですが・・・。ともかく、アリシア様がしつかりして下されば、私は何も申しません！」

「えーっと、Hリーさん？ そ、そろそろ、侍女モード終わりにしてかないかな？」

休戦を申し込みつつ、お茶になだれこませた。

「ふう、きょうも紅茶がおこしつー。」

「また、そんな古～ネタを。」

「いいじゃない、これくらい。負け狼組の方が萌えるけどねー。」

「あなた、あの商家に消されるわよ、こんなネタやつてると。」

「へへっ。」

「まあ、いいわ。それで、明日からの予定、ちゃんと把握してるの？」

「ござりまないでよ～。美人さんだと迫力が、い、いえ、はい、眞面目にやります！」

「えーっと、明日は殿下と歴史の講義を」一緒に受ける、で、その後は、礼節を側室候補の方々と一緒に勉強。で、殿下や姫君との間にお茶やお食事をしつつ、適度に人間関係を作れと。」

「・・・アリシア、そこで間違つても側室になれるよう頑張ると言わないのは、空氣を読んでるの？いえ、面倒くさいだけよね。」

「もちろん、空氣読んでるに決まってるじゃない。堅実にいかないと…小さなことからコツコツとよ！私の『老若男女の美人さんにお話を焼かれながら過ごす優雅な老後計画』の為に…」

「・・・殴るわよ。」

「たんじぶできたら〜！！！普通殴る前にこうセリフじゃないの？」

「何？次の予告つい事にしてもいいのよ。」

「申し訳ございませんでした。」

上から田線で見下ろされても、美人さんなら大丈夫！

「は、いかんいかん、新たな境地に至つてしまつ所だった。」

「何か言つた？」

「いえいえ、何でもございませんですよ、ハイー。さあ～って、明日の予習でもして、早く寝よっかなあ～っと。」

#### 4 早起きは、ふつり寝しますよね？

「はあ、早く寝過ぎて、夜明け前に目が覚めるって、どうなのよ・。  
・。」

「健康でよいしいんじやないですか？まあ、城内の方々が仕事を開始した直後でしうから、流石に身動きを取れませんが。」

「ですねえ～。って、事でエリーさんや、ものは相談なんですが。

「二ッコリ、笑顔は大切ですよ。

「はあ、わかりましたよ、用意致しますのでお待ち下せ。」

「ありがとう！」

ギロリ。

はあ。

「む、無言の圧力が…? う、そ、その代わり、あの子のお迎えと今晚の添い寝権を…」

「つーわ、わかりましたわ。」

「ちょっと、顔と動きが違つ！

かううじて、真面目な表情だけじゃあ一

「ううう、勝ったはずなのに、負けた氣がする……。」

「 はい、右見て～、左見て～～  
だつれもいませんねえ～～

「 さあ、お庭にでも行つて見ようかなあ？」

「 確か、あっちの方に東屋があつたよ～な。」

「 ……庭も広いわ！  
ちょっと、迷うつて！  
か、帰れるかな？」

「 ……あー、やつとたどり着いた。」

「 うん、やつぱりいい雰囲気だわ！」

「 すう～～～つ、はあ～～～。ああ～、気持ちいい朝だわ～。」

「 あら？」

「 あんな所に、赤い花？」

「 あれは

「 あなたは誰かしら？」

ビクッ！

後ろから聞いた声に、体が強張った。

「ねえ、そこのあなた。ここがどこだかわかつていて？ ゆっくりと振り向いて、所属と名を名乗りなさい。」

やつぱあ～。

ここで、もしかして王族の方々の・・・。

ゆっくりと顔を伏せ、礼を取りながら、振り向く。

「申し訳ござりませんっ！」

覚悟を決めて、面をあげた。

真っ赤。

真っ赤な、長い豊かな髪。

燃えるような輝きを放つ褐色の目、すらりとした肢体を黒いドレスで包んだ美女。

少し離れた距離さえ飛び越える迫力。

「・・・ワライエイタ」

「あなたの名、ではなさうむ。」

「あつ、も、申し訳ござりません。」

「名を、名乗つなさい。」

「あ、アリシアと申します。申し訳ござりません」

「家名は?と聞くのは野暮ね?アリシア、いいえ、アリスちゃん。」

「え?」

「いくら特徴が似ているといつても、見る人が見ればわかるもの。例え、多少、フフッ、奇抜な服装をしていてもね。」

バ、バレてる?

え、かなりのピンチ??

「なあ~んてね。」

「は?」

「ひつかかった?いやあ~ん、何て素直な子ー。」

「え?」

「だつて、私、部外者なのよね?。それに、立ち入り制限なんて元からかかつてないし、ここ。」

「!?.?.?.じゃ、じゃあ、え、でも、さつき。」

「そんなわかりやすく混乱してくれるなんて、かわいいわあ~。」

「あ、あのぉ・・・ビ、ビババまで~」

「ラティエイタ」

「え、それは」

「フフフ、その花に見立ててくれるなんて、粋だわ。気に入った。」

ゾクッ。

ちょっと、美女様の目が肉食獣に！

いやあ～な、予感が・・・。

「また、次に会えるのを楽しみにしてるわ。」

「え、それは、どういっ

ブワアサアッ

「わつー。」

一瞬の突風に目閉じて、とっさに上げた手で顔を庇った。

再び目を開けた時には、誰もいなくなっていた。  
ラディエイタの花を除いて。

## 5 Hリーの料理の発展

はつ！

私、普通に名乗つたやつたよ！  
頭悪すぎだひつよ、何やつてんだよ！

とか氣づいたのは、朝食の最中でした・・・。

けど、あの場合Hリーに罪着せちゃう事になるんだから、まあ、間違つてはなかつたのか。  
まで、なぜ偽名といつ手を思いつかない！？、と悶々としながらも、食事に集中。

つまつま～。

ああ～、表情だらけてるんだらつなあ、でも、まあこいやあ～。

さつすが、H高、レベル高つ！

いくりでもいけそつ！

ただ、朝食にはちょっと品数多にけど・・・。  
朝から、肉はびつよ。

いや、おいしくいただいたけどや。

出されたものはきちんと食べる主義ですからー  
お残しは許しまへんでえー！

と、しつけられてるからね、お隣のHリー様親子の無言の圧力で・・・。

笑つてない笑顔つて最恐だと思います。

それはおいといて~。

謎の美女現る！？

ですよ、奥さん。

見出しつぽく言つてみたけど、全くわかんないわ。  
う~ん、誰？というか、何だつたんだろう？

お供を連れてなかつたということは、貴族ではない?  
でも、あの氣品はどう説明すれば?  
王族レベルでしたよ、カリスマ性といい・・・。

いきなり現れて、いきなり消えるとか。

エリーに相談、いや、絶対怒られるから嫌だ!  
うん、謎は謎のままで!!

「アリシア様、こつまで隠つてらっしゃるんですか~。もうもうお支  
度を。」

「あ、はいはい。」

「返事は一度で結構ですよ。」

「は、はい。」

## 6 とりあえず、主要人物の紹介もかねてみようか

講義は、城内の一室、我が家の貴賓室のような場所で行われたわけ  
で。

贅沢に空間を使用して配置されたイスは、ゆったりとしたベロアの  
もの、特製の小さな机は手触りも細工も一級品、その右隣りには大  
理石の小さな机というか本とかの置き場？、逆側には纖細なガラス  
のグラスやら飲み物が鎮座していた。

うつわ～。  
うつわ～。

うん、ひくくらい豪華。

殿下もご一緒にすもんね、わかります。

そして、男女比はプチハarem状態。

他ではお目にかかれぬ光景だわ。

ちなみに、配置としては、殿下のお席が一番先生方に近い位置、そ  
の後方に公爵家のセリーヌ様を中心として、左右に侯爵家のカトリ  
ーナ様、私、その他大勢的なノリで後ろに扇状？でした。

まあ、人数少ないからそんなに説明する程のもんじやないか。

そうそう、セリーヌ様は艶やかな黒髪をきちつと結い上げたスレン  
ダー美人様です。知的な緑色の目が美しい、まさに淑女なお方で殿  
下のいとこ様でらっしゃいます。

カトリーナ様は赤味かがつたこげ茶色の髪をいつも華やかに結つて

らつしゃるお洒落美人様です。ほんきゅほん、色香に惑わされそうです。

非常に美形なお一人の後光が輝かしすぎて、他の方々がかす、ゴホゴホ、いえ、私の頭が残念過ぎるので、他の方々を覚えられなかつただけです、はい。

氣をとりなおして、講義は、つと。

あ～、先生方と殿下のやり取りの下、進められるつと。  
いや、ねえ、殿下の頭の良さに脱帽なんですけれど、やっぱり、女子には発言権も質問権もないわけですね、了解。

ちよーっと、この辺り気になつたんですけど、ダメですよねえ。

あれ？

ああ、聰明と名高いセリーヌ様も、この質問なさりたいんじや？

あーっと、カトリーナ様はちょっと飽きてきてらつしゃいます？

うーん、大変。

というか、せつかくの機会なのに、何、この置物にぎやかし要員な扱い。

殿下、本当に、徹底して眼中にないんですね、私たち。

とりあえず、両親にお伺いを立ててみた。

質問したいんだけど、していい？

-ダメ。女子はでしゃばるな。

だつて、せつかくの機会なのにもつたいないじゃない。

じゃ、家庭教師か本おくれ。

- それもダメ。抜け駆けしようと思われたくないもん。

もんつて・・・。じゃあ、娘がストレスで倒れてもいいの?  
- なら、帰ってきなさい。

う、それはちょっと。（せつかくの眼福が。）

- 我慢なさい。

皆さんと一緒に抜け駆けじゃないよね?

- お前はまた何をやらかす気だ!

大丈夫、何とかなりますわよ、お父様。オホホホホホッ。

という、手紙のやりとりをしてたら、季節の変わり目にになってしまつた。

よく耐えたわ、私。

## 閑話休題　麗しの乙女とその下僕たち

マーラン侯爵家次女 アリシア・カルタヘナ・マーラン。

彼女が側室候補として住まうことになったのは王宮の一室。豪華でいて、シンプルにまとめられた調度品。

ネコ足の優美な脚線美の長椅子には、先程到着したばかりの乙女。宝石のような目はふんわりとカーテンが揺れる窓越しに庭園へ向けられている。

長く豊かな金色の色彩は差し込んだ夕陽に艶を放ち、スリムで優雅なスタイルの体へと流れる。

長旅の疲れからか、少し物憂げな雰囲気が静かに場を満たしていた。侍女たちはその光景にそっとため息を漏らす。その空気を壊さないように。

声に出さずとも彼女らの想いはひとつだった。

ふと、侍女たちの様子に気づいたのか、そちらを向いた乙女はかわいらしく首をかしげ、口を開く。

「ミヤーオ。」

ああ、いつ見ても何てきれいな、リビアン（セモ）ー。

「ああ、かわいこリビアン、馬車に酔わなかつた？不便はなかつた？」

「つくりと近づき、その隣りに腰かけた、アリシアが優しくその頭をなでる。

「//ヤア。」

緑色の目を細め、アリシアの金髪よりも赤みがある柔らかな毛並みを上品にその手に押し付ける。

「リビアンさま、アリシア様も帰つていらっしゃいましたし、夕餉に致しました。」

「//ヤ～オ。」

「そうですね。今宵は私めがアリシア様より添い寝を仰せつかつておつままでの、お休みの前にマッサージはいかがでしょうか。」

「//ヤア。」

「そういう事ですので、アリシア様、夕餉の後はお一人の時間をお楽しみくださいませ。」

「え、ちょ、エリーさん…もつ少し、触れ合せ

「リビアン様は長旅でお疲れなのですよ、アリシア様。では、参りまじょうか。」

「//ヤーオ。」

「そ、そんなあ～。リビアン待つて～。マッサージなら、私が～」

閑話休題

隠しの女とその下僕たち（後書き）

あの子とは、マーティン侯爵家のお猫様、リビアン嬢のことでした。

## 7 策士? もちろん、私には無理ですから。

両親からの許可はいただいた!

つてことで、やってみたのが、お茶会。

まあ、順番にお招きしていくというのが恒例なんだけどね。

改めて顔ぶれを見ると、セリーヌ様とカトリー・ナ様とわが家以外、それぞれの御家の2番手、下手したら3番手のご令嬢方ばかり。まあ、第三王子ともなると、王位継承権なんてあつてないようなものだし、呪いつきで正妃も娶らない、側室（お話し相手）候補となればしょうがないか。

それは置いといて、とうあえず、公爵家と侯爵家からお伺いを立ててみましょうか。

「よハレルおいで下わこました。まだまだ拙いばかりの茶会ではござこますが、お楽しみいただけましたら、光栄ですわ。」

「まあ、じぢらじや、お招きありがとつゝぞります。本日は珍しい東方の茶葉とお聞きしましたので、菓子などお持ちしましたわ。お気に召すかしり?」

「嬉しそひざこますわ。ビリコつた菓子かしり。とても楽しみですわ。」

艶やかな黒髪の控えめに結い、すっと伸びた背筋に知性の煌く瞳。さすが、公爵家のご令嬢だわ。

「ふふつ、東方の茶葉にお菓子なんて洒落てます」と。体を清める

ものかしら、それとも、美しさを保つものがしり。」

「よくご存知でいらっしゃいますわ。カトリー・ナ様のお美しさの秘訣でいらっしゃるのかしり?」

「まあ、それはどうでしょう?」

「あら、とても残念ですね。『教授』ただけるかと期待しましたの」「」

優雅に扇子で口元を隠す様でさえ色気が!!  
これが噂の殿方ホイホイってやつですか!?  
殿方じやないけど、ひつかかりそうだわ。

赤味かがつたこげ茶色の髪はゆつたりと結い上げられ、茶会でもおかしくないギリギリの範囲でハツと田を奪われるよつ、華やかに結われている。

と、まあ、主要な『令嬢の描写』はここまでにして。  
つて、え?他の『令嬢』?

もちろん、後ろで相槌打つたり反応して下さりますよ、はい。  
お一人でかすん、ゴホゲホ、私の目が節穴なので割愛といつ事で。。

さて、どう切り出すか。

和やかなんだか、そうでないんだかわからないお茶会つて、ほんと肩が凝るから苦手なんだけど。

「やういえば、アリシア様はこちらに馴染まれまして？差し出がましいかもせんけれど、少し気になつておりましたの。」

いいバス來た～～～！！

「ええ、戸惑ひとも少くなつて参りましたわ。ですが、まだ不安に思ひ所もござりますので。」

少し憐れな笑顔で困惑氣味にittと。

「あら、何かおありなの？そつなのでしたら、おっしゃつてみては？」ねえ、皆様？」

「やうですわ。幼い頃から、こちらにいらっしゃる方々ばかりですもの。お力になれるかもせんわ。」

釣られてくれた～～～！！

「私などには勿体無いお言葉ですわ。けれど、恥を忍んで打ち明けてもよろしこのでしようか。」

「あら、そこまでおっしゃったからこそ、教えていただきませんと、気になつて眠れなくなつてしまいそうですね。寝不足はお肌の大敵ですのよ。」

「そこまでおっしゃつていただけのでしたら、『ご講義についてなのですが・・・あの、わたくし、『ご講義の内容でわからない所がたくさん出ててしまつて・・・もちろん、殿下の御為のおんためご講義ですから、内容が深く多岐に渡つてのものとは存じておりましたけれど。皆様に』迷惑をかけてしまわないかと。」

「やうね。確かにアリシア様のおつしやる通り、講義内容はとても高度なものですね。正直申しますと、私も多少なりとも気になります。」

「では、やうこいつたがはざひじゅうしゃるのですか？」

「いろいの蔵書をお詠みしておつますわ。」

「わあがはセリース様。わたくしなどでは、そのような方法では追いつきませんわ。」

「ですが、いくひいろいの蔵書がすばらしくても、専門的なものになれば心もとないですわよ。現に、美容の書物など限られておりましたしね。そこから派生した各國の文化もありますのに、残念で仕方がありますわ。」

「まあ、やうでしたの。では、どうすればよこのでしょ？。」

「それでしたら、殿下の講義へ差し支えのない程度で、私たちだけで講義を開いてもよろこびでござなへて？」

「そんなことが可能ですか？」

「何も全て殿下と同じ師について必要もござこませんじ。各自野でそれぞれの師を用意すればよここと。皆様の御知り合いでござりますのでは？」

意味深な流し三。

ま、競争を促して、良い師を集めむおつもりでしょ？

やはり、策士でらつしゃるわ、セリーヌ様。  
お慕いしてもいいですか？

「いなこじともいざわこませんわ。ねえ、皆様？」

「おお！」

カトリー・ナ様、のっぢゅこしました?  
勝氣な所もまた、イイ!!

「では、皆様の学びたい分野を決めて、どなたと御知り合いかを申  
し合わせればうまくいくのではござわこませんか?」

「やつですわね。殿下の御名を汚さぬ為にも、力をつくしましょう。

「

「ええ。」「はー。」

はあ、仕切つていただけるつて、何て楽なの！  
セリーヌ様、一生ついていってちゅつてもいいですか！

## 8 山あつ谷あつって、平坦な道はないんですか。そうですか。

ま、そんなこんなで勉強できる機会が一層増えるところ、嬉しいのか悲しいのか複雑な状況に。

王家の系譜という名の歴史でしょ、世界史でしょ、世相も絡めた文化史、算術に、礼節も大幅増量つて、中々の豪華ラインナップ。えへへえ～、ものすつごに贅沢なはずなのに、あれ?何か目から水が?

はっ!

気がつけば、愛しのリビアンとの時間が!?

え、ちょ、Hリーさん?

自習が終わるまで触れ合い禁止とか、の〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

少しでいいから、モフらせて下さいお願ひします!!

リビアン、かわいそうな子を見る目をしないで・・・。

もう無理、立ち直れない・・・。

つてことで、気分転換にエリーの侍女ルックで城内を散歩なんにしてしまつたり。

ああ～、そういう格好で確か謎の美女にあつたんだつたつけ?

もひひん、Hリーには言つてないけどね。

懲りる?ナニソレオイシイノ?

はつ、あんな所にお美しい方が！  
ちょっと、ちょっと、なんて眼福な~~~~~！

もつ、辛抱たまらん！！

テンションMAXな内心を侍女スマイルで押し隠し、そそっと近づく。

窓辺でまどろんでらした、黒い髪のお方がすつといちらり窓に元覗けられました。

ああ、なんて美しい瞳。

「申し訳ございません。お寛ぎの所、無粧な邪魔をしてしまい、何とお詫び申し上げてよいやい。」

その場で出来うる限りの謝罪の礼をとる。

そつと皿線を上げれば、ふいつと、興味無さげに視線をそらし、私など皿に入らぬとばかりに身繕いをなさん。

「美しい」という言葉は貴方様の為にあるのですね。ああ、その御髪に触れてみたいなどと、恐れ多いことを考えてしましました。」

私の失礼な物言いを咎めるでもなく、身繕いを続ける高貴なるお方。

「ああ、本当に美しい。もし丑うなら、我が姫のお皿通りを許していただきとついぞりますわ。我が金の姫も貴方様とお比べするのもおじがましいのですが、中々のものですよ。」

ふっと、顔を上げる黒髪の君。

「（）興味を持つていただけましたか？マニアンの姫の部屋を（）存知でしょうか？まあ、ご存じでいらっしゃる。流石ですわ。」

スッと音もなく立ち上ると、優雅に尾っぽを高く持ち上げ、こち  
らへ歩いていらっしゃるのな、またにネコの中の王侯貴族ともこゝべ  
き気品に満ち溢れた、おネコ様！

黒く豊かな毛足は長く、艶々と煌き、その瞳はまさに琥珀のよう。  
あら？ どなたかに似てらつしゃる？

黒い御髪に黄色い宝石のような目。

ま、いいわ、とりあえず、おネコ様とうちのコレドンとの出会いの  
方が先決ですわ。

楚々として、後ろにつき従い、黒髪のおネコ様をお部屋へご案内し  
た甲斐がありましたわ！

「お嬢様！ また、何で格好を…どうして、そうメイドの格好と仕草  
が板について！

しかも、何で生き生きとなぞつてゐるんですか…」 もつり

片手をエリー側の横にすっと突き出し、もう片方は口元に当たて、  
静かにするよう示すと、しぶしぶながら、黙ってくれた。

エリーだつて、リビアンの旦那様探しに力入れてるの知ってるのよ、  
わたくし！

ま、あの子は誰でも魅了しちゃつ小悪魔ちゃんだからじょりがない  
んだけどね？

緑色の宝石のような目に、赤みがかつた金色の豊かな毛皮を纏つて  
いるのにスリムで優雅なスタイル、ピンとたつた耳にふさふさのし  
っぽ。ああ、いつ見ても何てきれいなの、リビアン！（親バカ）

「つひ、おお～、黒髪の頬、かなり紳士的でいらっしゃる。お伺い

を立ててから近づくなんて、かなり慣れてらっしゃるわねえ。」

「お嬢様、何実況中継しちゃってんですか・・・。つて、まあ！？ リビアンがあんなに近くまで近づくのを許すなんて！？ 何者ですか！」

「つて、Hリーも興味津々じゃこのよ～。」

「や、それは、お嬢様の大変なリビアンのことですから・・・。つて、あんなに近づいて。まあ！」

「あら、毛づくろこまではじめちゃったわね～。私つて、愛のキューピッドの才能があるのかしら？」

「お嬢様、それ、シャレになつてしませんよ。見る目があるのは認めますが、まず、『自分のお相手を見つけてくださいまし！』

「ほ、ほほほほ。小声なのに、ジーして、そこまで迫力をつけられるのか、本当に感心しますわ～。」

「お・じょう・さ・ま～！」

「あ、もうお帰りになるみたいよー。」

「え、あ、扉をお開け致しますわ！」

適度に矛先をそらしても、侍女モードになつたHリーは気づかない。

ほんと侍女として、立派過ぎるわよねえ。

でも、それが逆に考え方だわ、お父様。

「いやつ。いい、申し訳ござれこそせんー。お怪我させなじ  
たかー？」

「いえ、御気になさりやない。しかし、先触れもなく参上した非  
礼をお詫び申し上げます。

マーアン侯爵の御息女、アリシア様はいらっしゃいますでしょうか。

「

うつわ、いきなり来客ですかい！

秘儀、光速変身、早着替え！

「ヒリー、どうかしましたか。」

「アリシア様、近衛隊隊長のセルベア様がお尋ねでいらっしゃいます。

」

「あら、セルベア様、ご機嫌麗しゅう。どうかなさいまして？」

「アリシア様、突然の参上を御許し下せ。」

「まあ、御気になさらないで、急ぎの用件があありますのでしう？」

「は、有難う御座います。実は、こちらにシャルル様が御邪魔していると御聞きしたのですが、御存知ありませんか？」

「シャルル様？」

「まあ、黒髪の君。あなた様がシャルル様でらっしゃいましたか。」

「ああ、安心致しました。どこかへフラツとお出かけになるのいつものことですが、夕餉の時間まで御帰りにならないので殿下が心配しておいででしたよ。」

「「殿下!?」」

「は、申し訳御座いません。差し出たマネをお許しください。」

思わず、わたしをゴニゾンしてしまったエリーは平謝り。  
あっけやー、やっぱ。

マニアック家以外だと、普通使用人は許可がなければしゃべっちゃだめだもんねえ・・・。

対して、近衛隊長は侍女の非礼より、知らなかつた事にびっくり顔。

「もしや、御存知なかつたのですが、シャルル様の事。よく、御一緒の肖像画が描かれていたのですが。」

「申し訳ございません。私の無知を露呈してしまいましたわ。確かに思い出してみれば、殿下のご肖像で拝見しておりますわ。ただ・・・。肖像画と実際にお会いした時とはやはり隔たりがござりますのね。」

「一いちからいりや、まだいらして間もない姫君に御説明が足りず、失礼致しました。」

そういうて、お辞儀。

好意的に取れば誠実を絵に描いた感じ、深読みすれば田舎者なの忘れてましたってか?

「まあまあ、頭をお上げになつてください。殿下もお待ちでしょつて、お互い謝つてばかりでは堅苦しくなつていけませんわ。」

顔を上げる近衛隊長。

めんどくさいからタヌキさんでいいかしら？  
だって、お人柄が読めないんですもの。

「そうですね。さ、シャルル様、行きますよ。

「ニヤー。」

「それでは、失礼致します。」

「ニヤーオ。」

「御機嫌よつ。」

「ミヤーオ。」

あら、リビアン、あなた乗り気ですわね。

鳴き声に応えるかのよつこ、もつ一度振り返つてから、シャルル様  
はお帰りになつた。

「ええっと、ヒリー。どうじよつか・・・。」

「・・・私に言わいで下わい。」

扉を閉めた状態のまま固まつたヒリーの背中に情けない声をかける。

「だつて、殿下のおネコ様・・・。」

「お嬢様、知つて連れてきてたら、本氣で首絞めてる所ですよ。」

「そんなわけ、あるかあ～～！」

「だから、始末が悪いんです。あなたの無意識ほど感じことはないんですから。」

「うう。・・・」「めんなさい。」

思いつきり不可抗力なんだけど・・・。

でも、ほんとびひょ。

だつて、両想じつほいんですけど・・・。

「お父様に、リビアンの旦那様候補決まつたよ つて手紙書くべきかな? はは。」

「そつこーで連れ戻されますよ、両方とも。完全に抜け駆け以外の何物でもないでしょ。殿下のお氣を惹く意味で。」

「だよね〜・・・。あははははははは。」

かくなるつえは、もう嫁に出すしかないか!

「今、リビアンを嫁に出すつてお考えになつたでしょ。」

ギクッ!

「それ、賄賂作戦と一緒にすからね。」

「は、はははははは。」

「それに、リビアン命の旦那様と奥様が許すとお思いですか?」

私は協力なんてしませんから、って、そっぽ向かれても・・・。  
わたし一人で叩き切られて来いと・・・？

「ひどいわ、エリー！」

「泣き真似してもなびきませんからね。」

「うう。」

「はあ、どうあえず、何か考えましょ。」

「そだね。」

次のお茶会が、もう少し先だったのが救いだわ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9892v/>

---

たで喰うムシもすきずき

2011年11月17日18時02分発行